中学校の体育授業における「体つくり運動」の実態と在り方の検討

－保健体育教師の意義の捉え方の変容とその契機－

野村　千紘（筑波大学大学院）

１．目的

本研究の目的は,中学校の体育授業における「体つくり運動」の実態と，保健体育教師の「体つくり運動」に対する意義の捉え方の変容およびその契機を明らかにすること,それをもとに今後の「体つくり運動」の在り方を検討することとした.

２．研究方法

1)「体つくり運動」の実態に関する質問紙調査

I 県の公立中学校保健体育教師 70 名を対象として、授業の実態と，教師の意義の捉え方について尋ねた．選択回答は数値化して集計し，自由記述はカテゴリーに分類した.

2)「体つくり運動」の意義の捉え方に関するインタビュー調査

質問紙調査で「体つくり運動」に対する意義の捉え方が変化した経験があると回答した５名を対象として、意義の捉え方の変容とその契機について尋ねた.逐語録を作成し,授業の概要は要約し,意義の捉え方の変容は，まとまりのあるエピソードで切り分け，各カテゴリー名を付けた.

３．結果と考察

1)「体つくり運動」の授業の実態（課題①）

「体つくり運動」の実施率は 95.7%であったが,そのうち独立単元で実施している人は 52.2%で,先行研究（渡部 2014，深谷ら 2016）と比較しても改善されていないことが明らかとなった.「体つくり運動」の意義の捉え方は,「体力向上」についての記述が最も多く,「体ほぐしの運動」に関する記述が少なかったことから，意義の理解が不十分であることが示唆された．授業に関する困難な点について，計画段階で困難に感じている人は 24.3%，実施段階で困難に感じている人は 15.7%で,「体つくり運動」に対する課題意識を持つ人が少ないことが明らかとなった.

2)「体つくり運動」の意義の捉え方の変容とその契機（課題②）

「体つくり運動」の意義についてほとんどの人が，活動内容や目的がわからず,「体つくり運動」を曖昧なものだと感じていた．研修等の経験，役割意識，新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたこと等を契機として,「体つくり運動」の目的や学習内容についての理解が深まっていた.また,新型コロナウイルス感染拡大により，運動することの大切さに改めて気付き，運動を実生活に生かすための知識や方法を学習させることの重要性を感じていた.

４．結論

本研究では,「体つくり運動」の実態と意義の捉え方，教師の意義の捉え方が変容した契機を明らかにした．これらを踏まえて，まずは教師の「体つくり運動」の授業に対するイメージを形成するために，大学の教員養成課程での「体つくり運動」を必修化することや，教員研修会の充実を図り,「体つくり運動」が他の領域とは異なる特性を持つこと，その特性を生かした教材，評価の仕方等を学ぶ機会が必要である．加えて，教師自身が課題意識を持ち，授業改善に努める姿勢が重要であると示唆された.

５．主な参考文献

1）深谷秀次・早川健太郎・渡部琢也（2016）小学校における「体つくり運動」の状況―教員の意識調査を通して―．子ども学研究論集，8：5-20

2）渡部琢也（2014）体育科教育における体つくり運動の現状について．名古屋経営短期大学紀要，55：13-22